

みあかり



天皇陛下御即位20年奉祝提灯行列

於 宇治橋前

古代から「火」は神聖なものとして扱われてきた。周りを照らし、焼き払うことにより不浄を浄化する。その様な教化特集号にしたいと願い「みあかり」と名付けた。

目次

- | | |
|-----------------|-------|
| ●伊勢路へ落語で参る！ | P 2～3 |
| ●飯南支部総代作法講習会 | P 4 |
| ●ヤーヤ祭り | P 5 |
| ●特殊神事 お日待ち神事 | P 6 |
| ●教化活動実践例 国旗啓蒙運動 | P 7 |
| ●鎮守の森を守り育てましょう | P 8 |

教化特集号 第18号

三重県神社庁
庁報編集委員会

伊勢路へ落語で参る！

三遊亭栄楽

師匠円楽の後押し！

日本橋スタートは元々十一月四日でしたが師匠五代目三遊亭円楽が間際の十月二十八日に亡くなり、告別式が五日となりました。恩人である師匠の旅立ちですから、見送らずにはいられません。急遽二日遅らせ、六日の出発となりました。この師匠の死がこの旅の大きな後押しとなりました。

師匠は七十六歳でなくなりましたが、テレビ『笑点』で司会をし、寄席を建て、落語に光をあてました。存分に自分の人生を生き切りました。師匠の死で、人生は自ら

「江戸の旅を体感！」と題して白装束にわらじ履き、江戸の旅人が携帯した物を持ち、平成二十一年十一月六日から十一泊十二日で江戸日本橋から伊勢の神宮まで一八里、四五五キロを徒歩で旅をいたしました。かかったわらじの数は二十二足。街道筋で施行として受けた金額が二六、一一〇円。これは当然こちらから要求したものではありません、伊勢参りをしているからお金を渡したいということを受けて取ったものです。

お伊勢参りのきっかけ

お伊勢参りのきっかけは健康のためでした。生活習慣病を改善すべくウォーキングが始まりました。

その頃、旅の噺をシリーズで演じていました。落語には滑稽噺し、人情噺し：等の噺がありますが「旅噺し」というものがあります。この噺の基本的な目的地は伊勢でした。これは噺家になる時には知らなかったことですが、調べていくうちどんどん伊勢に引き込まれていきます。噺家の世界で体験すると芸に深みがあるといわれますが、これは本物を見るとリアリティーが出るということです。基本に忠実な私は伊勢まで歩くべきではないかと思ったのです。しかしです。噺家になつたくらいですから、スポーツ体質ではありません。高校から歩くことをしています。バイクで高校に通い、自分

の部屋の横に単車があります。五歩でバイクに乗れ、学校に着くと二十歩で教室に入れます。年をとるに従って足が退化していきました。ですから私の足は少女のように細いのです。

元々お伊勢さんとは縁があります。伊勢の皇學館大学を出て、神職資格を得ました。

また平成二十年からその母校で落語を中心に「江戸の芸能史」という講義を行うことになりました。

「落語、講義のためになる！」と決断したのでした。



がカリキュラムを決め、その障害を乗り越え、自らを成長させるのだと感じました。師匠の死は、私に「今度はお前の番だ！精一杯生き切れ」といわれているようでした。「よし！この旅に全力を傾けよう」という気になりました。ですから告別式の時は泣くどころか武者震いしたのでした。

この「師匠の死」が呼び水になりました。新聞の取材をうけ、破格の大きさで取り上げてくれました。新聞記事の見出しは「円楽師匠、旅路を見守って」「円楽師匠の励まし力に」でした。この記事がテレビの取材となり、静岡市由



比の薩埵峠から五分間の生中継となりました。テレビ媒体の力は偉大で、伊勢に着くまで多くの方から「頑張れ！」の言葉をいただきました。このように取り上げられたのはどう見ても師匠の恩恵なのです。亡くなっても応援して下さいているかと思うと、ぐぐっと迫ってくるものがあります。

落語会開催 今年も御蔭参り

無事旅を終えることができましたが、自分もやれば出来るという自信と血圧の薬を飲まず済むというご利益がありました。平成二十二年も同様の計画をいたしております。今回の日程は

十月二十五日から十一月十三日までの二十日間の予定で、タイトルを「伊勢路へ落語で参る！」としました。今回は街道筋の十数ヶ所で落語会を開き、木戸銭は



神宮の奉賛金とします。「お伊勢参り」と題して神宮と旅について、色々な場所でも多くの方々に「お伊勢さんの姿」を知っていただき、幸せなひと時を過ごしたいと願っています。今、その場所を求めているところです。



プロフィール

本名 川上昭光

(かわかみあきみつ)

昭和三十四年十二月十六日

福岡県嘉穂郡嘉穂町大力生まれ

昭和五十九年三月

皇學館大学卒

昭和五十九年四月七日

五代目三遊亭円楽入門

「栄楽」命名される

平成三年十月

真打昇進

平成二十年

皇學館大学非常勤講師

住所 〒一〇〇〇〇三五

東京都足立区千住中居町

九一八一三〇一

電話・ファックス

〇三―三八七九―一〇〇四

三遊亭栄楽ホームページ

www1.odn.ne.jp/eiraku

三遊亭栄楽倶楽部

飯南支部教化事業報告

『総代神社作法講習会』

三重県神社庁飯南支部では毎年九月頃に支部の教化事業の一環として、管内神社の総代を対象とした「飯南支部神社作法講習会」を開催している。



この作法講習会は、各神社の祭典に奉仕する氏子総代に神社作法の習得と神社神道への更なる理解を深めることを目的として、毎年開催されている。

講習では、事前に各作法の講師を神職に分担させ、教本を作成し、各担当神職は責任をもって実習、解説を行う。

白衣袴の着付け、手水作法、玉串拝礼、手長作法の他、祭典の流れや神饌に関する基礎知識など幅広く行われる。

毎年、色々な質疑があり、神職にとっても祭式作法について自己確認が出来る機会となる。

講習会には毎年、多くの新任の氏子総代が受講している。参加者からは「日頃の祭典奉仕で行って

いる所作に細かな作法があり、大変勉強になった。是非、次の祭典奉仕に生かしたい」などの感想が寄せられている。

本講習会は祭式作法の習熟はもちろんのこと、神道教化の役割も担っており、支部事業として大きな意味を持つ。

又、飯南支部は小規模な支部ではあるが、管内の全神社関係者が集まる機会はない。しかし、この講習会では全神社から三名以上は参加する為、各神社同士の交流や支部の協力体制の強化など様々な効果もある。

総代は神社作法を通じて、その作法の一つ一つが神様への敬いの気持ちへの表れであり、作法の大切さと、本講習会の重要性を感じている。

支部では、講習内容についても、神職が毎年検討会を開き、教授法や講義内容の改善を図っている。講義のなかでは「清め塩」、「祓へ」など毎年新たなテーマを設け、様々

な工夫が行われている。

県下でも作法の講習教本を頒布する等の教化事業を行っている支部はあるものの、実際に講習会を開催し、長年に亘り継続している支部はないのではないだろうか。

小規模支部の利点を生かし、更なる氏子への神社理解を深める教化事業としてご紹介したい。

各神社の秋の例祭が十月から始まり、講習を終えた氏子総代が早速活躍することとなるのである。



天下の奇祭

「ヤーヤ祭り」

尾鷲神社

東紀州のほぼ中心に位置し、昔より尾鷲松、鰯漁などの林業・漁業などが盛んな町として有名な尾鷲において、尾鷲七郷の総鎮守として崇め祀られてきたのが尾鷲神



社（宮司 加藤守朗）である。

ヤーヤ祭りとは、この尾鷲神社の例祭の通称名であり、この呼び名の由来は武士が合戦時に名乗りをあげる「ヤーヤ我こそは…」からといわれる。

ヤーヤ祭りは、旧正月にあたる二月一日から五日の五日間、神事、祭事が賑わう祭りである。その形状は、旧尾鷲町である二十町から毎年三町が禊祓町となり、その代表者を禊人（せきびと）と称し、汐撫・弓射などの役人を従えて神事、祭事における奉仕の主役を務めていく。

二月一日、午前零時「御扉開き」の儀で大神をお呼出ししてよいよ祭りが始まると、二日から四日の間、夜にヤーヤ行事が行われる。宵宮（よんみゃ）と呼ばれ、二

十町の若者達（ヤーヤ衆と呼ばれる）が集団を組んで「チョウウサ・チョウウサ」の掛け声と共にぶつかり練り合う。この姿は、主祭神の武速須佐之男命の武勇を称えるが如く勇壮豪快であり、この祭りの祭事の一歩の見所となる。

ちなみに祭り期間中、各神事・祭事前に必ずといっていい程、海中に飛び込み身体を清める禊祓を行うが、この事を垢離掻き（こりかき）と呼ぶ。各禊祓町の役人等は毎夜、垢離掻きを執り行い諸事奉仕するのが古くからの習わしとなっている。

最終日の五日は午前九時三十分には献幣使参向のもと祭典を斎行した後、禊祓町は槍・鉄砲隊に囲まれた大名行列を、禊祓町以外の町からは手踊りで町中に練り出して宮上がりを行う。この頃から神社が一段と賑わい、境内において宮上がりした順番に、禊祓町は子役の子の薙刀振り、それ以外の町は手踊りなどをそれぞれ披露する。

宮上がりした役人等は再び垢離掻きを行い、穢れをおとした身体で大弓の儀を奉仕、最後に尾鷲神社の神宝である獅子頭の出御の吉凶占いで祭りを閉じる。



地域が支える特殊神事

伊賀留我神社『日待祭』 ひまちさい

三重県北部、四日市市羽津に鎮座する伊賀留我神社（宮司 岩田健司）では、例年、祈年祭の前夜、二月十五日の夕刻より、十六日の早朝に亘って日待祭が執り行われている。

『神道名目類聚抄』に「日待は前夜より潔斎し、明旦の日の出を待って拝す。（中略）故にこの名



公民館にて行われる日待祭

あり」とみられる。天照大神は、我が国至尊の大神であり、その広大無辺なる御神威は、太陽の御光として仰がれているが、日待はあくまでも、祈年祭などの重儀なるお祭りを控えた前夜の厳重な精進潔斎にもとづく忌籠りに、本来的な意味があったと考えられている。かつては、羽津地区でも、祈年祭をはじめ大祭の前夜に、その都度行われていたようである。伊賀留我神社の日待祭の歴史は古く、地元の古老の言い伝えではあるが、今から二百余年前、江戸後期の天明四年頃に遡るといわれている。古くは女人禁制で、直会の準備からすべてを宮守青年団によって行い、まず日待の宿を二月十日の夜に決める。それは、団長宅にて、三方にのった氏子各戸の名前が書



日の出を拝し、神社へと向かう氏子たち

かれた名札を、御神酒を浸したお札で撫で、お札に張り付いた家をお札の宿とする神占神事である。昔は、神様から選ばれたと、誉れなことであった。日待祭当日の夕方になると、宿をつとめる家の床の間に、古くより伝わる神殿が飾られ、天照大神のお札をお祀りして、紋付・袴に正装した区長、氏子総代、組長らが参列して、日待祭が斎行される。直会のちは、眠ることなく神殿をお守りし、親睦を深め、同じ地域に住む仲間意識を確かめ合い

ながら忌籠ったそうである。午前三時頃になると、全員が宿の風呂に入って身を清め、午前五時、神殿を庭先に移し、日の出を待つ順次拝礼。その後、神殿を交代で担ぎ、伊勢音頭を唄いながら神社へと向かい、無事御奉仕申しあげた旨の奉告祭を行い、続いて午前十時からの祈年祭に臨む。

この歴史ある日待祭も、時代の流れと共に、生活様式も異なり、地区地域の人口の増加により、昭和五十三年からは、自治会役員、氏子総代、組長等によって行われるようになり、宿も町の公民館に固定されて現在に至っている。

伝統ある神事や儀礼というものは、私たちの祖先が長い歴史の中で、深く生活に根ざした一つの必然によって成り立つものである。氏神、氏子意識が薄れつつあるなか素朴な信仰を伝え、祖先を尊ぶ氏子の方々の強い心によって、今日までこの日待祭が継承されていることは、誠に注目にも値するものと言えよう。

教化活動実践例

“関宿の町並みに日の丸がはためく”



神社界では『祝祭日に国旗を掲げましょう』という運動を展開して家庭用の国旗セットの頒布を行ってきました。しかし世間では祝日＝休日という感覚が先行して、その日には日の出とともに軒先に国旗を掲揚してまず祝意を表するという習わしがなかなか定着しないようです。そのなかで、宮司の努力と氏子の理解によって国旗掲揚運動がめざましい成果を挙げている最近の実例を紹介します。

東海道の旧宿場町の関宿を氏子地域に持つ亀山市関町の関神社では、以前から社報等で国旗掲揚の呼びかけを行ってきましたが、氏子の反応はごくわずかでした。そこで平成18年に新しく宮司に就任した木崎喜富氏は、国旗普及のためには自ら積極的に行動すべきだと考え、氏子地域のなかから普及重点地区を選ぶこととしました。

まず神社のすぐ南を走り旧東海道宿場町の姿をそのまま残している関宿まちなみ保存地区の家々の軒先に観光客へのアピールを兼ねて国旗を掲げていただく計画を立て、平成20年春の連休前に県神社庁から国旗セットをまとめて入手し、一軒ごとにセットの購入と祝日の国旗掲揚を依頼しました。商店の多い地区の人々は好意的に応じてくれ、隣家が揚げるなら自分のところもという具合に次々と購入者が増え、宮司も戸別訪問の際にドライバーなどの工具を携帯し、要望があればその場で旗竿を差し込む金具を取り付けるなどの配慮をしました。その結果、観光客がひしめく祝日には宿場町の面影をそのまま残す木造の家々に、文字通り「軒を連ねて」日の丸がはためくという風景が実現することになりました。また街道周辺の氏子からも、「国旗を揚げたい」との声が次第に聞こえるようになり、さらに宮司が兼務する近くの神社の総代会長からセットをまとめて購入したいとの要望もあって、活動開始後一年半で約100家の国旗の普及を見ることができました。

木崎宮司は、「以前から神宮大麻や氏神神符の戸別頒布に自ら従事したり、早朝の日供奉仕や境内の整備清掃に努めている宮司の姿に共鳴してくださって、神社周辺の氏子の皆さまが国旗掲揚のお願いに即座に協力してくれたという側面もあり、やはり神社側と氏子との常日ごろからの深い信頼関係がこのような活動を推進する原点となっているようです。しかし氏子の全戸に国旗を配布するにはまだまだ時間を要すると思います。これからは住宅地のなかの四つ辻の角などの目立つお宅に重点的に掲揚を依頼して、そこから全戸普及に広げて行けたら良いのではと考えています」と話しておられます。





豊浦神社の 「バクチノキ」について



緑のコーナー

豊浦神社（宮司 東 浩成）境内の社叢約50aは暖地性植物がよく繁茂していることから、昭和38年に三重県の天然記念物に指定されています。主なものにクスノキ、タブノキ、ヤブニッケイ、カゴノキ等があり、特にクスノキは巨木で樹齢千年といわれ、幹廻り10mにおよぶものです。また日本固有のヤマトチバナの群生地としては県内随一です。こうした特色ある樹木のなかでも、社殿に向かって右側に滑らかな紅黄色の木肌をみせて異彩を放っているバクチノキは、一見の価値ある樹木として知られる存在です。



バクチノキは別名ハダカギ（裸木）とかビランジュ（毘蘭樹）ともいわれ、バラ科サクラ属の常緑高木で房総半島以西の本州・四国・九州・沖縄など太平洋岸の樹林内にみられ、決して珍しい木ではないようです。しかし当神社のバクチノキは幹の周囲約3m、樹高約25m、その大きさは恐らく県内一といわれる巨木です。ちなみに神奈川県小田原市にある国指定天然記念物のバクチノキは目通り幹周囲4.9m、樹高約20mとなっておりさすがに太いですが、樹高では豊浦神社のほうが上まわっているようです。バクチノキの名前の由来は、ある程度大きくなると灰褐色の樹皮が鱗状にはがれ落ち、その跡が赤茶けたまだら模様となります。その様子が博打に負けて身ぐるみはがれ、しだいに裸になるのに例えてこの名がついたといわれます。このため賭け事に関わる信仰対象にもなり、お守りにしたのかこの木には樹皮を切り取った小さな痕が数カ所みられます。



9月に直径6～7mmの白い花をたくさんつけ、5月頃長さ1.5cmほどの紫黒色をした楕円形の実をつけます。葉からは杏仁水（バクチ水）が得られて咳止め薬などに用いられ、樹皮からは黄色の染料がとれます。当社近辺には志摩半島から南の熊野灘を一望できる高塚公園展望台や世界遺産の熊野古道始神峠はじかみなどもあり、絶好のウォーキングコースになっています。休日にはぜひ御参拝下さい。

（北牟婁郡紀北町紀伊長島区三浦1）

教化にともなう原稿・ご意見を
募集しています。（下記編集委員まで）

教化部長	森本 巖	（北牟婁）
教化担当理事	宇治土公貞尚	（伊勢）
前教化部長	原 光夫	（津）
編集委員長	村尾 憲一	（四日市）
委員	山戸 敏弘	（津）
〃	山際 理也	（志摩）
〃	安達 誠明	（三重）
〃	秦 昌弘	（四日市）
〃	中里 貴彦	（度会）
〃	常山 和哲	（飯南）
〃	原 忠照	（神社庁）

御社名欄にご利用下さい。

発行所 三重県神社庁 津市鳥居町210-2 ☎059-226-8042 発行日 平成22年6月30日